

# 玄義分を通して見たる善導大師

## 導師の淨土教

小林瑞淨

### 一 導師の歸淨

導師の思想の性宗的なることは、其第五部九帖を通して明かに窺ひ知ることができるのであるが、歸淨以前、其中孰れの宗派に屬し聖道的生活をなされたのであるか云ふに、玄義分に觀經の價値を論じて、所謂「菩薩藏收頓教攝」なりとし二藏の教判を採用せらる。

由是觀之、三論宗であつたやうである。尤も二藏の名稱は多くの經論にあり、諸宗に通用するのであるが、特に三論宗にては専ら自宗の教相とするからである。

支那の三論宗に楊子江北の四論宗と江南に於ける三論宗とあり。そして北地四論の教系は南地三論のその如く明瞭でないのであるが、南都の古傳説であるのか、宜然房明道は實に次の如く述べてゐる。「北地派の祖は曇鸞大師にして道綽禪師之を相承し、禪師と殆んご同時に法朗大師の弟子明勝法師、北地に於て四論を弘め、導師之を繼紹せられたのである」と。

尙ほ空也上人は發心求道集に「善導は三論宗の大師、念佛門の師なり」と明言せらる。固よりその據る所不明であるが、以上の點を綜合すれば北地の四論宗に賴りて修道せられたるは間違ひないのであらう。果して然らば四論宗と淨土

教、抑も奈何なる交渉があるのであるか。

史に徴するに上古春秋時代から楊子江を境界線として、その南北の兩地は思想の潮流大いにその趣きを異にしてゐる。儒教は北地の思想にして、老莊の教は南地の思想である。北地の思想は謹嚴にして南地のそれは幽玄である。又北地の思想は實際的にして南地のそれは理的想である。この傾向は歴史の上下を通じて、宗教のみならず文學美術等に至るまで各々その特異性を有するのである。三論宗も亦、江北には智論の教理を加味せる四論の法門行はれ、江南は反之、理想的なる三論の研究盛んであつた。

四論の中、三論は消極的なる諸法皆空論であるが、智度論十住毘婆娑論は積極的なる實相論である。消極の窮まる所積極を生じ、真空の裏面には自づから妙有を孕らむ真空の眞理を高潮せる三論には、淨土の宗教成立せぬのであるが、妙有の世界には自づから指方立相の實際的法門現はれて來なければならぬ。

是れ龍樹菩薩の智論等に淨土教ある所以であつて、亦洗練されたる之れありてこそ、始めて人類の靈的要求を充實するに至るのである。是に於て導師の歸淨せられたる思想的展開、偶然ならざるを知るこゝができやう。

特に導師は持律謹嚴の裡にも熱情の性質の持主であり、導師の淨土教に因縁の深厚なりしこゝは諸傳の一致する所であり、又當時の教界政治界の趨勢は導師を驅つて益々淨土の修道に向はしめたやうである。

## 二 御疏の異彩

導師の淨土教は、總じては三經般舟三昧經等を所依せられたるも、正しく其教義に關しては、別して觀經を所依せられた。是れ一は當時觀經の研鑽熾んなりしと、一は歸淨の門戸之に由りて開かれたるが爲めである。

今導師と同時若くは已前に於て、觀經を研究し之が註釋を作りし著名の人に、淨影天台嘉祥を始とし、靈祐法常道闇

慈恩西明等あり。皆當代に於ける教界の龍象なるが、孰れも自己の立場を基準として觀經を觀られたから、未だ一人として其眞髓を發揮せられなかつた。偶々道綽禪師ありて、觀經に據り一切經論を通依して「唯有淨土一門可通入」路の義を顯彰せられたるも、尙未だ其幽玄に觸れ得なかつたのである。

茲に導師は奮然として古今を楷定し、觀經中心の淨土教を建設すべく企てられた。従つて導師の御疏の教義は、彼等が地論天台三論戒律法相等の見地から考察せるものみ全く其趣きを異にし燦として異彩を放つのである。

二者の觀經に對する見解の相違は、臆がて導師の教義の特徴である。其教義に於て、所謂三佛の大悲二尊の本懷を探り、以て御疏の述作を大成せられたから、宗祖は「西方の指南行者の目足なり」と歎じて偏依善導の宗義を確立せられ記主又「覺王勸化の細帙迷徒誘引の遺範なり」と讚せらるゝに至つたのである。

### 三 導師の信念と態度

導師は御疏述作の前に方りて、七日を期して日別阿彌陀經を誦すること三遍、阿彌陀佛を念すること三萬遍せんことを誓ひ、至心に祈願して曰く「若し我が期待する所、三世の諸佛二尊の大悲に契はゞ、願くば夢定中に一切境界の諸相を見せしめ給へ」と。乃ちその靈感を得て一僧指授の下に述作の稿を竟り、更に復び毎日護念經を誦すること十四回、稱名三萬、七日に及び三次に亘りて不思議の靈相を感じ「此義已請證定竟一句一字不可加減欲寫爲者一如經法」と墨痕淋漓として御疏の終りに書き添へられたのである。

吾等は導師が、その述作に際し奈何に眞劍なりしか、又その内容の眞實性に對し奈何に大なる確信を有せられたかを感ぜずに居られない。

想ふに、吾が佛教の教義は表面上如何に合理的なるものも、決して單に理論の爲めの理論、知識の爲めの知識として

唱導されたのでなく、必ず之を體驗化して骨髓まで徹せしむるをその目標としたのである。之を逆に言へば骨髓まで徹したる體驗的保證を得て、初めて教理として主張したのである。導師は正さに世尊傳統のこの態度を保たれたのである。御疏は總論と本文解釋との二部に分かれ、その總論は則ち女義分である。

女義とは、垢障の凡夫佛の願力に乗じて斷證を假らず、直に報土に入るの主張を始めとし、其外、散善自說三輩偏散九品唯九等諸師の十六皆定九品聖人十念別時意等の謬解に對して、其義深妙にして、上は觀經の奧義二尊の教意に契ひ下は凡入報土の機に適するを云ふのである。

此の女義分の初に御疏の序分たる十四行の偈頌を掲げ、次に正しく觀經の女義が述べられてある。其開卷第一に於て「先勸大衆發願歸三寶」と殷々たる無聲の洪鐘を鳴らして吾等を警醒し、それより頌を結びて發願と歸敬との意を叙し切に三寶の加備を仰ぎて願生淨土の信念を披瀝し、說偈造疏の功德を擧げて一切衆生に捧げられてある。

吾等は此の頌文を拜誦して、導師の敬虔眞摯熱烈なる態度を讃仰するに俱に、自己の迷妄を慚愧し衷心より覺醒せねばならぬと思ふのである。發願歸三寶の洪鐘の響きは、吾等が自我の妄執に囚われ人生の實相に醒めざるを警覺せられたものであらう。

#### 四 歸 敬 三 寶

導師はかく吾等の迷執を鞭撻せられたのであるが、重ねて十四行の中、七行の偈頌を以て切々として自ら三寶に歸敬しその照鑑を仰がれてある。

現代人心の裡に缺如せるものは當さにこの敬虔眞摯の信念である。この信念無きが故に社會の綱紀紊し、道德腐敗し思想國難となりあらゆる生活の不安定を來し、又如來の教徒としても熱ある飛躍が出来ないのであらう。

抑も此の三寶の信仰は、世尊成道の後ベナレスに始めて法を説き、五比丘を濟度せられたるに淵源するのであるが、

滅後に至りて益々發達し、一面には最も普遍的信仰である理由から初期佛教の一般信仰となり、念誦の語としては歸三寶の句を生じ、佛教歸依の儀式としては歸三寶戒となり、他面には佛教々學の發展に伴ひ複雑なる解釋を加ふるに至り滅後教徒の三寶觀は小乗の三寶觀と大乘の三寶觀とに分かれ、大乘の三寶觀中、更に三寶の同體觀と別相觀となり、その別相觀は亦理想的三寶觀と、具象的三寶觀とに別れた。此の分類は淨影慈恩證觀等の一致せる所である。吾等はその尊ぶべき内容を玩味し、先づ須らく斯の情操を養はねばならぬ。

聖徳太子は十七憲法第二條に「篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸にして、萬國の極宗なり。何れの世、何れの人が是法を貴ばざらんや。尤だ惡なるは鮮し能く教ふれば之に従ふ。それ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直ふせむ」と。導師の芳躅と共に實に千古の洪範である。

## 五 淨土の教興

導師は女義の序分に、世尊は印度に降生して八萬の法藏を開かれたのであるが、凡惑徧攪するに由なき吾等の爲めに施化利生と發迹入源の淨土の法門を闡明せる由を叙せられてゐる。

その施化利生門とは、世尊は機に従て五乗の法を説かれたるも、其等の聖道の修行に堪へざる凡夫は自ら隨緣得度の法を選択するに不可能であるから、當さに大悲の本懷である如來の法門を説かんと思召されたるとき、會々王舍城に一大悲劇起り、夫人切りに淨土往生を求めその實踐の教を讀はれたから、此の機會に乗じて定散の要門を開き、亦如來の弘願を顯彰せられたのである。如斯く、衆生往生の内因、如來の増上緣等の法を説かれたるを施化利生門と言ふのである。

發迹入源門とは、施化利生の言説を拂つて佛意深妙の本源に歸入するの意味であるから、本願の眞實をも辨へず、名

號の利益をも解せず、亦安心起行をも知らず、唯釋迦の發遣彌陀の來迎を信じて、心に助け給へし念じ、口に南無彌陀佛を唱ふるのである。所謂、單直仰信の愚鈍念佛の法門である。

斯く二門に分かるゝも施化利生の外に發迹入源あるのではない。蓋し施化利生の言語は佛の密意より出づるのであるから、根本に約して發迹入源門と言ひ、枝末に就て施化利生門と言ふのである。阿祖は教相第二重に於て、大に之を宣明されたのであるが、要するに前者は顯はされたる淨土の教義であつて、後者はその教義の淵源を指すのである。佛の密意、佛の全生命の現はれである。

宗教は之を吾等の立場からせば單直仰信であらねばならぬ。是れ導師が散善義に信機信法の妙釋を示して深信の要を高唱せられ、阿祖が鎮西の指導を奉じ、教相第一重に「總依三經別依一經總依一經別依一句」の判をなし、導師の淨土教の基礎を炳かにせられた所以であり、又「淨土宗」とは二字に習ひ極むるなり。安心の一字(信)起行の一字(故)なり。亦極めては一字(信)なり」の口傳ある所以である。

人類には盲目的に生きんとする意志を有するのであるが、又信ぜんとする貴ふべき意志あることは學者の立證する所である。導師はこの尊ふべき意志の根柢に培ひ、その長養を計り盲目ならざる眞實光明の信の世界を開拓せられたのである。

## 六 觀經の價值と内容

導師はかく淨土の興致を明かし、次に觀經の價值を批判して「今此觀經菩薩藏收頓教攝」なりと斷じ、その内容に就ては「今此觀經即以觀佛三昧爲宗亦以念佛三昧爲宗」となし、而して一心に回願して淨土に往生するを經體と示されてゐる。

菩薩藏收たる所以は、小乗教の代表とも云ふべき有部宗にては、他方の淨土を明さず、又上求菩提を説かざるに反し觀經には専ら凡夫往生を明かし、亦無上涅槃を期すに説く。既に他方の淨土を明かし、尙ほ佛果を目的とすれば菩薩藏である。頓教攝なるは、淨土門の意は凡夫一形十念の功に依りて速かに往生を遂ぐべし、と談するが故に所謂歴劫迂回の漸教に非らずとの意ろである。東西宗要に詳論せらるゝも今之を言はず。要するに大乘聖典中最高價値の宗教なりと決せられたのである。

更に觀經の宗旨を兩三昧させられたるも、觀佛三昧は夫人答請の宗にして、念佛三昧は自説の宗である。何とせば觀經に答請自説の二門ありとするが諸師の解釋と殊にして、導師獨自の創見に屬するからである。而して導師の意見によれば、口稱名號を以て念佛三昧と稱し、相好觀を以て觀佛三昧とせられ、而かも念佛は正定之業にして、觀佛はその助業に過ぎずと斷定せらる。

是又、諸師の未だ曾て言はざる所であるのみならず、彼等は觀佛念佛の概念を明らかにせず。亦寧ろ觀佛を主とし念佛を従としたのであるから、毫も觀經の眞髓、三佛大悲の眞精神に觸れ得なかつたのである。

## 七 定 散 二 善

淨影天台等の諸師は觀經の定散二善の本文解釋につき二大誤謬に陥つてゐる。

一は十三定善の觀行九品、散善の行業俱に夫人の致請と言ひ、二には本文の十六觀は悉く定善なりと視たる點である之に對して導師は則ち定善一門韋提致請散善一門佛自説なりと喝破し、經文に依るに夫人は唯定善のみを請じて散善を乞へることなし。導師は致請に關する通別の五文を列ねて之を證し、更に夫人の「教我思惟教我正受」と致請せる思惟とは觀の前方便にして、正受とはその前方便に依りて正しく定心を得て、任運に依正の境を取るを意味するのであ

る。然るに、彼等は教我思惟の一句を九品に合して散善となし、正受の一句を通じて十六觀に合して定善とすも、華嚴經の所謂、觀經實地觀の文に照せば、思惟は定善に攝して散善に非るこゝ明白であるとし、進みて散善顯行緣の本文を擧て、散善は佛の自説なるを論證せらる。

要之、定善一門は世尊隨他意の法門にして、散善特に念佛こそ隨自意の法門なりとする主張である。導師はこの主張の内容を明らかにする爲め、新たに九品散善の本文解釋に至りて所謂十一門義一百番の説明法を用ひ前人未發の卓見を發表せられてゐる。

## 八 九品の行人

九品の行人の資格を論ずるに諸師の説大同小異なれば、釋義の高僧と仰がれたる淨影の説を擧げて論破し、以て觀經の眞面目を發揮せられてゐる。

彼れ曰く「上三品の行人は大乗の聖者、中三品は俱に是れ小乗の賢聖にして、下三品は始學大乘の凡夫なり」也。若し斯の説に依れば、觀經は聖者の聖典にして、吾等凡夫の宗教ならず。導師は是れ所説の本心を把握せざる淨影の誤解なりとし、二個の理由を示して破斥せらる。

其一は聖人は淨土に生ずることを求むるの要なしの理由。其二は諸佛の大悲は偏に常没の凡夫を救濟するにあり。この理由にして、立義の本文に詳論せらる。

導師は特に觀經九品の經文を引き來りて自説を立證し、九品の機は總て流轉の凡夫なりとし、但緣に遇ふこゝ異なるに依りて九品の差別を爲す。則ち「上品三人は遇大の凡夫、中品三人は遇小の凡夫、下品三人は遇惡の凡夫なり」この斷案を下して、淨影の説を否定し、最後に重ねて汎く觀經の序文定散二善の本文に亘りて十個の聖教量を列擧し、當だ



に散善九品のみならず、十三定善も又凡夫の爲めにして、大小の聖人に關せざることを指摘し、善惡一切の凡夫をして専ら經説を信じて疑はず、如來の本願に乗じて同じく九品の者に沾はしめらる。

徹底せる導師の斯の光闡なかりせば、吾等は永へに救濟の宗教、如來の大慈悲に接するところは全然不可能であつたのである。

## 九 如來の身土

導師は、淨影が如來を八相成道の應身とせるは、金光明經攝大乘論の三身説の眞意を謬解せるに基くものである。こ一蹴し去り、進みて大乘日性經の明證を掲げ、大經の所説に由れば、如來は因願果成の佛身なれば報身ならざるべからずとし、觀經上三品の現文に照すも又疑ふべきなし。三論證せられてある。

如來の報身たることは、道綽禪師夙に安樂集に説破して彼等の蒙を啓かれた所であるが、之を聖典上に索むればその確證最も豊富なることは宗要玄記等の指示する如くである。果して報身とせば、報身は常住にして入滅なしとは諸經論の通説なるに拘らず、觀音授記經には如來に入涅槃の相ありと説かれてある。

導師はこの矛盾を説明するに、「大品般若經を拉し來りて、報身の如來も一機の前に入滅の相を現することあり、授記經は唯之を曰ふのみとし、凡入報土は絶對に許すべからずとの非難に對しては、導師は熱烈なる口吻もて答て曰く「若し衆生の垢障を論ぜば實に欣趣し難しと雖も、正しく佛願に托して以て強縁となすに由り、五乘をして齊しく入らしむることを致すのである」と、宗家獨自の見解を告白せられてゐる。

蓋し、佛教思想の發展に伴ひ、現身佛を通じて法身佛を見出し、更に報身佛を發見するに至れるのであるが、吾等の内的要求は永遠の生命と眞實の光明とにあるのであるから、無量光の報身佛ならでは吾等の信仰の對象とならず。又斯

の現在説法の報身佛の願力に乗じてこそ、初めて吾等は永遠の生活覺醒の生涯に入ることができるのであるから、導師は力を極めて「是報非化凡入報土」の大義を高唱せらるゝのである。

## 一〇 別時意識論

吾等の宗教救済の聖典として、導師の深く私淑せられたる觀經に對し、攝論一派の學徒は所謂別時意識方便説なりとして反對したのである。

その詳細は文献の徵すべきものないのであるが、懷感の記載する所に據れば、彼等は觀經に念佛十六觀等の修道を明かすも、是れ凡夫の淺行なれば唯發願に均し。従つて攝論の別時意識に屬すべきである。こゝ、或は攝論中には唯願別時意識言ふも、其意ろは念佛も亦別時意識なることを顯す説き、遂に觀經下々品の十聲稱佛を以て方便説さなし、たゞ遠生の爲めに因こなるのみ、順次往生の果を引かず抗撃したやうである。然るに導師の意見に依れば、斯の如き反對は全く攝論そのもの、眞意に背ける牽強附會の妄説なり。

先づ彼等の鐵壁とする攝論を觀るに、成佛別時意識往生別時意識ありて、前者に於ては萬行成佛を實説として、一行成佛を方便す。後者に於ては、願行と唯願とに別ち、願行往生は實説にして、唯願往生を方便なりす。無著菩薩の斯の大綱論に由れば、願行具足の修道は方便説ならざることは勿論なり云はねばならぬ。

然るに觀經下々品の十念は願行具足の念佛である。何こなれば南無の二字に願あり行あり。心に助け給へし思ふは則ち歸命亦是れ發願回向の義なれば、これ願にして口に南無と唱ふるはこれ行である。阿彌陀佛の四字は亦これ行である。由是觀之、十念の上には十願十行ありて具足す。されば之を攝論の所説に對照するに、全く唯願無行の別時意識の法門に非るこは昭々乎として明かである。特に方便説に對しては、諸佛の證誠なきは一般の通則である。而るに小經の一

日七日の念佛往生に對し、十方諸佛の證明護念があるのであるから益々眞實了義の實説たるや疑ひなし。ミ斷じ、筆鋒鋭く反駁を加へて當時の教界に反省を促がされたのである。

惟ふに、安樂集中、破異見邪執ミ廣施問答の二章の叙述を視るに、當時死も吾が問祖時代に禪僧の批判を享け孤城落日の觀ありしが如く、我が正系の淨土教に向ひ多くの教義的迫害ありしが、攝論學派のそれは其の最もなるものであつたやうである。懷感は「攝論爰に傳はりてより百有餘年、諸德皆この論文を見て西方の淨業を修せず」ミ慨歎してゐる。女義分に特に別時意論あるは蓋し之が爲めであらう。

道綽禪師等又斯の問題に對し釋明せられたのであるが、導師の寸鐵人を殺す底の銳鋒に比較するときは、未だ微温的たるを免れぬのである。吾等斯論に關する女義の本文を拜誦せば、導師の堂々たる態度ミ熱火の如き信念に感激を禁じ得ないのである。

## 一一 導師の自覺

導師は觀經を色讀して、第一に注意せられたるは其序分に説かれたる王舍城の悲劇であつたやうである。

この悲劇の事實なりしや、否やは固より知る由もがなであるが、少なくとも大經所説の五痛五燒の具體的表現ミ觀るべく、そして大經の所説は、人生の現實を描寫せるものであるから、之れは則ちその縮圖であつて、夫人は人生に惱み悶ゆる一切衆生を代表せるのであるこの自覺である。斯の自覺の心眼を以て觀經を眺め來れるとき、夫人の致請はそのまゝ、吾等の要請にして、如來に關する世尊の説法は悉く凡夫の爲めであらねばならぬ。

而かも仔細に検討すれば、散善念佛の一法は隨自意本懷の發露なりミ味到せずにはゐられぬのである。

第七觀の初に方りて如來は空中に住立して別意の弘願を顯彰し給ひ世尊は第九觀に至りて「光明遍照十方世界念佛衆

生攝取不捨」を顯はし、其他九品來迎、下三品の念佛等超世本願の廣大なるを説かれてあるからである。特に導師の心靈の琴線に觸れしは最後の附屬の經文であつて導師は遂に「上來定散兩門の益を説くも佛の本願に望むれば意ろ衆生をして一向に彌陀佛名を稱せしむるにあり」を道破し。茲に觀經の深意を體得し、大悲の本懷を發揚せられたのである。

それで玄義分には「諸佛の大悲は苦ある者に於てす心偏に常没の衆生を愍念し給ふ」を陳べ、又弘願とは「大經に説くが如く、一切善惡の凡夫生ずることを得るは皆阿彌陀佛の大願業力に乗じて増上縁となさざるなし」を説き、或は二佛の方便を仰信すべきを明しては「仰ぎ惟れば釋迦は此方より發遣し、彌陀は即ち彼國より來迎し給ふ。彼に喚び此に遣る。豈去らざるべけんや」を仰せられてある。

玄義の外の解釋分を拜するも到る所自解佛願の妙釋に接することができ、行儀分の著書を通しては吾等は導師自ら種々の行法を行はれたるを知るに同時に、吾が淨土教の儀軌は全く導師によりて完成せられたるを發見するであらう。

## 一一一 究 竟 大 乘

先進の所説により三國の佛教を大觀するに、原始佛教は偉大なる世尊の直接感化の下に、世尊を師主と仰ぎ世尊の如く安心立命しやうとして集まれる教團であつて、理論よりも實行、説明よりも味得、形式よりも精神を重んじたのである。之に對して小乗教では、原始佛教を繼承しながら専ら世尊の遺せる經律を以て教團の生命たらしめやうとし、從て之を整理し、註釋して以て佛教をして教條的に確定しやうと企てたのである。

爲めに原始佛教の單純さが複雑化し、その人格中心主義が教法中心主義となり、その精神主義が形式主義となれる結果、世尊の自由なる大精神より大に遠ざかり、一般民衆に對して直接の接觸を保ち之を指導することができなくなつた

のである。斯の行き詰りを打開して復び世尊の自由なる大精神、適化無方の態度を時代に即して發揮しやうこの運動を起したのが實に印度に於ける大乘教徒である。

彼等は世尊を理想とし世尊の精神に還れし云ふのを唯一の旗幟としたのであるから、小乗教徒の消極的なるに對して積極的であり、彼が個人的解脱を目標せざるに對して之は社會の救濟を目的とし、彼の隱遁的なるに對して之は活動的である。されば大乘教も小乗教も共に原始佛教を繼承しながらも、大乘教は小乗教以上に世尊の眞意に迫るものがあつたのである。

然るにその大乘佛教が支那に傳るに至り、一方には學解佛教となり他方には佛教の眞理は山間に遊履し戒律を嚴守し禪觀に耽けることによりて初めて到達せらるゝものであるとの信仰となり、爲めに支那佛教は自づから僧侶の專有物となり實際の行動は逆轉して小乗教化したのである。尤も此の間に多くの宗教が出没したのであるが觀經を基調せざる導師の淨土教のみが獨り大衆の歸依を博し疊だに當代に於てのみならず遠く後世の人心を支配し吾が日本に於ては、宗祖を通して眞に魂に即して國民生活の全體に喰ひ入るゝに至つたのである。之れ世尊の本懷佛陀の大精神が導師に頼りて復活せられ宗祖に依りて發揚せられたからである。吾が淨土宗の教義が究竟大乘なりと言はるゝは決して偶然でない。